エリザベス・アルネール，ソルヴェイ・ソーレマン（著）　伊集守直・光橋翠（訳）
『幼児から民主主義　−スウェーデンの保育実践に学ぶ−　』
2021 年　新評論 A5 版 228 頁　定価（本体 2,200 円＋税）

松尾 杏菜*

近年、ドイツやイタリアのレッジョ・エミリアなどヨーロッパ諸国を中心に、民主主義を幼児教育の基礎に位置づける動きが見られるようになってきた。スウェーデンも幼児期から民主主義に取り組むことを重視している国の一つである。スウェーデンの幼児教育システムは、それまで終日保育を担う施設と短時間保育を担う施設が独立して存在していたが、1996 年の改革を機に「förskola」（就学前学校）に統一された。日本の「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」のような役割を果たす「就学前学校カリキュラム」では、民主主義と「子どもの権利条約」がその中核に位置づけられているという。

本書は、スウェーデン中部に位置するエレブルー市の就学前学校の教師、エリザベス・アルネール(Elisabeth Arnér)とソルヴェイ・ソーレマン(Solveig Sollerman)によって書かれた *Kan barn förstå vad demokrati är? : inspiration och utveckling i förskolan*（子どもは民主主義とは何かを理解できるか？−就学前学校におけるインスピレーションと発展）の訳書である。著者らは、教師として働く傍ら、子どもの影響力と民主主義にフォーカスした仕事に長年従事してきたという。この経験をもとに、就学前学校における民主主義のさらなる発展に向けた教師の役割を議論する際の出発点となることを目指して執筆されたのが本書である。テーマとする民主主義について著者らは、「日常生活における民主主義」と表現し、日常の中の出来事と人間同士の関係を通して発展していく民主的な考え方であると論じている。それゆえ、本書全体で数多くの具体的なエピソードを取り上げることにより、身近なものとして民主主義を捉えられるような構成となっている。

本書は、原著の全訳、全 10 章を中心に構成されているが、日本語版の訳書として出版するにあたり、冒頭では、訳者の 1 人である光橋によって、スウェーデンの幼児教育の大まかな枠組みが解説されている。また、同様に本書の終わりには、特別寄稿として、民主主義に取り組むことを目指した日本における実践が紹介されているなど、日本の読者が本書を理解し、ここで取り上げられている実践を自身の実践に引き付けて考えられるような配慮がなされている。

第１章および第２章では、就学前学校における民主主義に向けた取り組みの発展に関する議論の土壌として、民主主義の基本となる考え方と「子どもの権利」について論じている。著者らは、民主主義の基礎は､すべての人が自分の気持ちや意見を聞いてもらえるという共通の価値を持つことであると考えている。したがって、就学前学校に、子どもの声や表現していることがしっかり聞かれるような環境を提供することを求めている。その反面、民主主義を発展させる取り組みにつながらなかった事例も取り上げ、就学前学校の構造が妨げになっている可能性を指摘している。「子どもの権利」という側面からは、スウェーデンのカリキュラムにおいて民主主義の実現のための要素として重視されているイニシアティブに言及し、それを保障する大人の責任に焦点を当てている。イニシアティブとは、一般的に子どもが遊びや生活の中で自らの新しい考えや計画を率先するということを意味する概念であるという（p.32 訳注より）。

第３章から第７章では、就学前学校における民主主義を支える校長や教師、保護者の役割が具体的な実践の場面から描き出されている。第３章では、校長の役割に焦点を当てる。校長には、教育活動を導くことを意味する教育的リーダーシップを担う者として、子どもの影響力やイニシアティブの発揮に対する責任や、教師たちが民主主義に向けた取り組みを理解するための議論の機会を提供する責務が求められてい

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

る。そして教師たちが日常の保育を通して民主主義の実現に取り組んでいくわけであるが、第４章では、その際に大人の優位性を念頭におく必要があることを強調し、子どもに焦点を当て、子どもと会話することによって乗り越えることを提案している。続く第５章では、子どもたちの遊びたいという願望と就学前学校の構造との間のジレンマについて取り上げ、空想力（ファンタジー）の活用を提案している。第６章では、就学前学校における民主主義の取り組みに対して、保護者も子ども同様に影響力を持つ必要があることが述べられている。

以上のように様々な大人の役割に加え、学校という枠組みの中で民主主義の価値を理解するための取り組みを発展させていく方法として、著者らは、子どもとの会話を重視する。第７章では、就学前学校での活動や､先生たちの経験や考え､子どもたち自身のものの見方を可視化する機会として会話を捉えている。ここでいう会話とは、子ども自らが話したいという意思を持ってなされる会話である。大人の問いかけに対し、子どもが正解を答えようとする場合や、逆に子どもが話したがっているにもかかわらず聞いてもらえないような状況を例にあげ、全ての子どもが話をしたくなるような文脈や問い方、想像力や雰囲気といった会話の文化を作り出していくことを求めている。

第８章および第９章では、著者らの子どものイメージが示されている。第８章では、「子どもの視点」と「子ども自身の視点」を区別し、前者が大人の側から見た子どもの状況を指すのに対し、子どもたち自身が自分の置かれている状況や生活に対する理解や考えを指す後者に目を向けるべきであると主張している。また、スウェーデンの教育学者、モイラ・フォン・ライトの議論を引用し「固定的な視点」と「関係的な視点」という２つの視点を取り上げ、子どもたちがどのような存在「である」かという「固定的な視点」ではなく、どのような存在「になる」かという「関係的な視点」で捉えることにより、教師と子どもの関係性が変化するということを具体的な事例と共に記述している。第９章では、子どもたちを「十全な価値をもつ存在」として捉えることによって、教師が子どもたちを信じ、影響力を持たせることにつながると述べている。そして終章となる第１０章は、これから就学前学校において民主主義の取り組みを発展させていこうとするすべての人たちを鼓舞する文章で締め括られている。

日本は、民主主義国家と言われる一方で、若者の選挙での投票率や政治への関心の低さが顕著である。民主主義という言葉についても、知識や概念としては理解しているものの、どこか遠いところにあるものというイメージを持っている人が少なくないのではないか。それは幼児教育や保育の実践の場でも同様であり、保育現場で民主主義を意識する機会はほとんどないというのが現状である。

これに対し、著者らは、民主主義が日常の中にあるものだと語りかける。本文中では、例えば、オムツ替えや給食の場面が、民主主義に取り組む機会につながると示唆された。また、民主主義の取り組みの一つとして示されていた「子どもの声に耳を傾ける」ことや子どものイニシアティブの尊重は、日本の保育の中でも主体性といった言葉で、伝統的に大切にされてきたことであると考えられる。それゆえ、本書で書かれている取り組みに何ら新鮮味がないと感じる読者もいるかもしれない。しかし、重要なのは「子どもの声に耳を傾ける」ことの根底に、民主主義の価値、本書の言葉を借りるならば「全ての人が自分の気持ちを聞いてもらえるという共通の価値を持つこと」を目指す、という共有された意識があるということである。それゆえ、子どもの声はもちろん、就学前学校の教職員や保護者の声も当然聞かれなくてはならないのであり､それらの声を就学前学校の構造に反映させていくことが必要だと考えられているのである。

日本の保育現場では、遊びにおける子どもの主体性が重視されている一方で、例えば生活リズムや入園のタイミングなどは皆一様に設定されていることが多く、このような場面では「子どもの声が聞かれている」とは言い難い状況である。この点において、民主主義という意識を持ち、就学前学校での取り組みを深めてきたスウェーデンの保育から学ぶことは、数多くあるのではないだろうか。スウェーデンの幼児教育に関心がある人や研究者だけでなく、ぜひ、現場で働く多くの保育者にも手にとってもらいたい一冊である。そして本書を機に、日本の幼児教育の場においても「日常における民主主義」の語り合いが広がっていくことを期待する。